南米[アルゼンチン]



1 農畜産業の概況

アルゼンチン政府の最新農牧センサス(2010年)によると、農業経営体28万戸の所有面積は1億5500万へクタールで、このうち4650万へクタールが農地として、1億850万へクタールが牧草地として利用されている。ブエノスアイレス州、コルドバ州、サンタフェ州を中心とするパンパ地域は、肥沃で平たんな土地条件に加え、気候も穏やかで降雨にも恵まれており、農畜産物の主産地となっている(図1)。

アルゼンチンの農畜産業は、国内産業に占める比率は国内総生産(GDP)の5%程度であるが、農産物輸出額は全輸出額の6割強を占め、農畜産業は外貨獲得上、極めて重要な地位にある。なお、クリスティーナ・キルチネル政権(2007年12月10日~2015年12月10日)では、国内優先主義に基づいた輸出規制政策を実施したため、競争力のある一部農業以外の産業は衰退傾向が続いた。しかし、2015年の政権交代で、輸出志向型のマウリシオ・マクリ氏が大統領に就任したことで、輸出登録制度(ROE BLANCO)など輸出規制政策が廃止・削減され、今後の輸出増に期待が高まっている。

図1 アルゼンチンの主要酪農地域



資料:機構作成

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

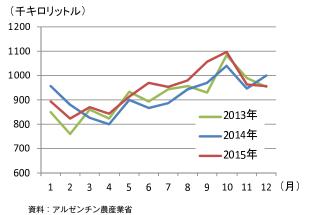
アルゼンチンの酪農は、放牧主体でありパンパ地域に集中している。主な生乳生産州は、サンタフェ州、コルドバ州、ブエノスアイレス州である。乳牛の主要品種はホルスタイン種で、全飼養頭数の9割以上を占めるとされる。

① 生乳の生産動向

アルゼンチン農産業省によると、2015 年の生乳生産量は、1131 万キロリットル(前年比2.8%増)と前年から微増した。

月別の生乳生産動向は、10月に最も生産量が多くなり、夏場の2~4月にかけて落ち込む傾向にある(図2)。近年は、放牧に加えてトウモロコシなどの飼料穀物を補助的に給与する飼養管理も増加している。

図2 月別生乳生産量の推移



② 牛乳乳製品の需給動向

2015 年の牛乳乳製品の消費量は、前年比5%減の 903 万キロリットルとなった(表1)。

表1 牛乳・乳製品の需給

(単位: 千キロリットル)

区分	2011	2012	2013	2014	2015
生乳生産量	11,206	11,339	10,971	11,010	11,314
輸出量	2,711	2,493	2,890	2,510	2,247
輸入量	11	6	27	21	9
消費量	8,393	8,918	8,304	8,239	9,027

資料:アルゼンチン農産業省 注:数値は生乳換算。

アルゼンチンは、全粉乳の輸出量で世界第3位に位置するなど主要乳製品輸出国の1つであり、ホエイやチーズの輸出も盛んである。アルゼンチン国家統計局(INDEC)によると、2015年の乳製品の輸出量は、33万2395トン(同10.2%減、製品重量ベース)、輸出額は11億2414万米ドル(同31.9%減)となった(表2)。要因として、最大輸出品目である全粉乳がEU産に押されて前年同様減少したことに加え、輸出登録制度(ROE BLANCO)による実質的な輸出規制が強まったことが挙げられる。

表2 乳製品輸出量の推移

(単位: 千トン)

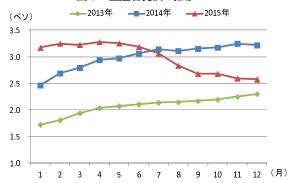
(十四:11:							
区分	2011	2012	2013	2014	2015		
全粉乳	202	201	182	144	138		
ホエイ	70	62	74	66	61		
チーズ	64	54	51	56	43		
脱脂粉乳	19	14	25	22	24		
その他	95	98	99	82	66		
合計	450	429	431	370	332		

資料:INDEC

③ 牛乳乳製品の価格動向

2015年の生産者乳価(乳業メーカーによる生乳 1リットル当たりの生産者支払価格)は、上半期は好 調に推移したものの、下半期は低下傾向で推移したこ とから、1リットル当たり2.98 ペソ(前年比0.2% 安)と前年並みとなった(図3)。

図3 生産者乳価の推移



資料:アルゼンチン農産業省



写真1 ブエノスアイレス州の放牧風景

(2) 肉牛・牛肉産業

アルゼンチンの肉牛生産は、肥沃なパンパ地域を中心に、アンガス、ヘレフォードなどヨーロッパ品種およびその交雑種による放牧肥育が一般的である。

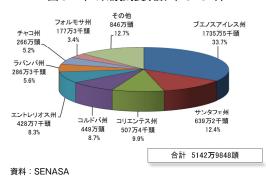
南パタゴニア地域と呼ばれるチュブ州、サンタクルス州、ティエラ・デル・フエゴ州に加え、2007年には北パタゴニアB地域と呼ばれるリオネグロ州とネウケン州が、2014年には北パタゴニアA地域と呼ばれるリオネグロ州、ネウケン州、ブエノスアイレス州の一部が、国際獣疫事務局(OIE)から新たに口蹄疫ワクチン非接種清浄地域のステータスを獲得した。また、同国のBSEについては、「無視できるリスク」と評価されている。

① 牛の飼養動向

2015年の牛飼養頭数 (乳用種を含む) は 5142万 9848頭 (前年比0.4%減) となった (図4)。州別では、ブエノスアイレス州 (33.7%)、サンタフェ州 (12.4%)、コリエンテス州 (8.7%) の3州で全体の5割強を占めている (図5)。



図5 牛の州別飼養頭数(2015年)



② 牛肉の需給動向

ア 生産

2015年のと畜頭数は、1215万6600頭(前年比0.4%増)、牛肉生産量(枝肉重量ベース)は272万7000トン(同2.0%増)となった(表3)。牧草の状態が良好となり、雌牛の保留が進展したことに加え、飼料価格が安値に推移したことで飼料穀物多給により出荷を早めた結果、生産の増加につながった。

表3 牛肉需給の推移

区分	2011	2012	2013	2014	2015
牛と畜頭数(千頭)	11,883	11,429	12,625	12,101	12,157
生産量(千トン)	2,497	2,596	2,822	2,674	2,727
輸出量(千トン)	234	188	201	212	199
1人当たり消費量(kg)	54.9	59.0	63.1	58.6	59.4
去勢牛生体価格(ペソ/kg)	8.1	8.9	9.6	15.1	17.9

資料: MINAGRI

注:生産量、輸出量、1人当たり消費量は、枝肉重量ベース。

イ 輸出

2015年の牛肉輸出量(枝肉重量ベース)は、19万8687トン(前年比6.4%減)、輸出金額は、8億6656万米ドル(同17.2%減)となった。これは、2014年に最大の輸出先であったロシアが、原油国際価格の下落を受け、ルーブル安に陥ったことで購買力が低下し、需要を大幅に減少させたことが大きな要因とされている。

なお、輸出管理政策のうち、牛肉輸出の最大の障害 とされている輸出課徴金(輸出税)制度は、政権交代 後に、大豆を除き廃止されている。

また、EU向けのヒルトン枠(一定基準を満たす骨なし高級牛肉に対するEUの関税割当制度、対象年度は7月1日~翌年6月30日)は、ドイツ向けが全体の6割弱を占めた。なお、アルゼンチンのヒルトン枠の年間配分数量は、2012/13年度以降3万トンであるが、2015/16年度消化率は、75.8%(2万2350トン)と、9年連続で割当数量を満たさなかった。

ウ消費

2015年の1人当たり年間牛肉消費量は、59.4キログラム(前年比1.4%増: 枝肉重量換算)となった。 1990年代の同数量は70キログラムを超えることもあったが、近年は50キログラム台後半で推移している。

② 価格動向

主要な家畜市場であるリニエルス家畜市場(ブエノスアイレス市)の2015年の肥育牛(去勢牛)価格は、 年率30%以上とされるインフレの影響などにより、生 体 1 キログラム当たり 17.87ペソ(前年比 18.3%高) となった。

3 飼料穀物の動向

アルゼンチンのトウモロコシ生産量は、世界の生産量の約3%を占める。牛肉生産が放牧中心であることから、トウモロコシの国内需要は生産量の3割程度と少ない。このため、2015/16年度(3月~翌2月)のトウモロコシ輸出量は世界貿易量の14.9%を占め、輸出実績では米国、中国、ブラジルに次ぐ世界第4位となっている。しかし、トウモロコシ生産の収益は大豆に比べ低いことに加え、2015年12月までは20%の輸出税が課されていたことから、輸出は伸び悩んでいた。政権交代後は輸出税が廃止されたことに加え、為替管理変動相場制を導入して、公定レートを実態に即した非公式レートに近づけることに成功したことで、価格優位性が増すと見込まれている。

一方、大豆生産量は世界の生産量の2割弱を占めており、国際市場に大きな影響力を有している。同年度の大豆輸出量は、世界貿易量の4%程度である一方、搾油後の大豆油かすの輸出量は世界最大である。トウモロコシと大豆は作付け時期が競合するため、それぞれの価格動向が作付面積に影響する。また、小麦は、大豆の裏作として生産される冬小麦が生産の大部分を占める。

① 政策 ~政権交代前後の変化~

アルゼンチンでは、穀物輸出に関し、主に輸出登録 制度と輸出課徴金制度を設けていた。

輸出登録制度は、国内への食料供給の安定と主要な 食料品価格の上昇を抑制するため 1976 年に導入され た制度で、輸出限度数量や輸出許可書の有効期間など が定められていた。政権交代後は、輸出量を管理する 統計的な役割として存在はしているものの、形骸化し ているとして、廃止を求める声が強い。 輸出課徴金制度は、2002 年 1 月の通貨切り下げに 伴う大幅な税収減を補完するため、通貨切り下げで恩 恵を受ける主要輸出農畜産物に対し設けられたもので ある。政権交代により、同制度はトウモロコシについ ては廃止されたが、大豆については 30%の税率が残さ れている。

② 飼料穀物の需給動向

米国農務省 (USDA) によると、2015/16 年度のトウモロコシ生産量は、2900 万トン (前年度比1.0%増) となった。また、大豆については、5680 万トン(同7.5%減) となった (表4)。

表4 主要穀物生産量の推移

公 · 工文权的工注重(7)日(9)									
	(単位:百万ト								
区分	区分/年度		2012/13	2013/14	2014/15	2015/16			
トウモロコシ	生産量	21.00	27.00	26.00	28.70	29.00			
	輸入量	0.01	0.00	0.00	0.00	0.01			
	消費量	7.00	7.90	8.80	9.30	9.20			
	輸出量	16.50	22.79	12.85	18.45	21.68			
	期末在庫	0.99	1.32	1.41	1.91	1.06			
大豆	生産量	40.10	49.30	53.50	61.40	56.80			
	輸入量	0.00	0.00	0.00	0.00	0.68			
	消費量	35.89	33.61	36.17	40.02	43.27			
	輸出量	7.73	7.74	7.84	10.57	9.92			
	期末在庫	18.10	21.81	26.05	31.92	31.70			

資料:USDA

注:年度は各年3月~翌2月

USDA では、同年度のアルゼンチンの輸出量を、トウモロコシは 2168 万トン(同 17.5%増)、大豆は992万トン(同6.1%減)としている。

③ 価格動向

2015 年の穀物 1 トン当たり生産者販売価格は、トウモロコシが 1040.5ペソ (前年比 10.0%安)、大豆が 2214.7ペソ (同 10.8%安)、ソルガムが 1071.0ペソ (同 9.9%高) となった (表5)。

表5 主要穀物の生産者販売価格

(単位:ペソ/トン)

区分	2011	2012	2013	2014	2015
トウモロコシ	703.4	715.0	924.5	1,156.6	1,040.5
大豆	1,306.2	1,652.4	1,838.4	2,483.3	2,214.7
ソルガム	695.0	693.3	842.0	974.7	1,071.0

資料:アルゼンチン農産業省



写真2 トウモロコシの播種作業



写真3 薬剤がコーティングされ、食用と混ざらないように緑色 に色付けされたトウモロコシの種子